

令和 6 年 6 月 10 日現在

機関番号：13501

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2020～2023

課題番号：20K01038

研究課題名（和文）近世西欧の「君主鑑」の検討を通じたカトリック的理性観念の質的転換

研究課題名（英文）Fundamental change of Catholic theological idea of reason on the research of early modern Western "Mirror of Prince"

研究代表者

皆川 卓（Minagawa, Taku）

山梨大学・大学院総合研究部・教授

研究者番号：90456492

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究ではアリストテレス的な配分的正義を基礎とする中世盛期以降のカトリック君主鑑が、16～17世紀の宗教改革・宗派対立の中、神学から演繹される統治者倫理から、政治の神学的理論武装と論争ツール化を経て、君主の「暴力」の神格化・別格化と「告解」による君主倫理の個人主義化への二極化に進むこと、そしてその原動力が、印刷術による君主鑑読者の拡大と統治者倫理の「公共圏」化、それによる「理性」概念の「脱属人化」と「脱神秘化」、「共通材化」によるものであることを、ファン・デ・セゴビア、エラスムス、マキアヴェッリ、ボッターロ、コンツェンの君主鑑およびブーゼンバウムの道徳神学の比較検討から明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

従来の近世ヨーロッパ史では、宗派対立の一方の当事者となったカトリック教会が精神界を支配し、スコラ学的な理性理解に執着し、政治の合理的発展を妨げたという見方が支配的であった。これに対し本研究は、中世末期から近世前半の君主鑑の変容を、その成立の歴史的脈に位置づけつつ比較史に検討することによって、カトリック世界でも独特の形で政治の合理化が進んだことを明らかにした。そこでは教義の枠内で神と権力の正統性の関係が論じられ、それがメディアによって公共論化した結果、中世的な「神の国家」は正当な暴力の独占者と告解に正義を求める道徳的個人に分かれ、政治学が論じる主権と道徳神学が論じる私的自治に収斂した。

研究成果の概要（英文）：In this study, the Catholic monarchy after the High Middle Ages, which is based on Aristotelian distributive justice, proceeded from the ruler ethics deduced from theology to the theological theory armament of politics and the tool of debate in the midst of the Reformation and sectarian conflict in the 16-17th Century, and the polarization of the monarchical ethics into individualism through "confession", and the driving force behind this. A comparative examination of the moral theology of Juan de Segovia's, Erasmus', Machiavelli's, Botero's and Contzen's mirrors of prince and Busenbaum's moral theology reveals that this is due to the expansion of the readership of monarchs through the art of printing and the process of "Civil publicity" of ruler ethics, and the "depersonalization" and "demystification" and "commonalization" of the concept of "reason" as a result of this.

研究分野：西洋史/Western History

キーワード：実践神学としての君主鑑 旧約聖書 公会議 マキアヴェッリ 正戦論 イエズス会 告解 道徳神学

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

本研究は2017～2019年度の科研費研究(B)「中近世ヨーロッパにおける『正しい認識力』観念の変遷」の成果を受け、未解明の部分が多かったカトリック教会の影響が強固であった地域に特化して行った研究である。上述の科研費研究の結果、北西ユーラシアでは中世後期から18世紀までの間に、「正しい認識力」が自然(人間関係や人間個人を含む)の中の「聖霊」(自然を動かす本質。近世の間に個人の「精神」に変容する)を認識する力としての普遍的な「正しさ」(フランスの後期スコラ学や東中欧から西欧にネットワークを持つ少数宗派など)と、新たな政教統合のシステムとして再編された「国家」単位の「正しさ」(ツァーリ=モスクワ総主教体制のロシアやカトリシズムの機会主義的解釈の上に構築されたハプスブルク「帝国」)に分化したこと、一方でフランス農村の女性やポーランドのセイム(部分的にはフィレンツェ共和主義やドイツの裁判制度でも)など、この二つのタイプの一方が浸透しきらない領域の中から、公論を「正しい認識力」の方法的核心に置くシステムの成長が見られたことが解明された。一方その分化がもっとも遅く、両者の結合が長く維持されたカトリック教会支配下の政治権力(「国家内国家」としてなお自立性を保っていたカトリック教会自体やイタリア諸国を支配するスペイン帝国、ドイツのカトリック領邦など)では、外国人研究者の協力も仰いだ分析にも拘わらず、「正しさ」の発展メカニズムをなお明瞭に捉えることができず、それを構造的に説明する欧米の研究も欠けていた。

### 2. 研究の目的

そこで本研究では、関係する専門領域の研究者によって、聖界と世俗の両者を架橋していた著作ジャンルである「君主鑑」、特に宗派對立期に、一見人文主義的「寛容」から非妥協的な権力主義あるいは神学主義に回帰したイエズス会のその変容を、テキストの内容のみならず、論題内容と概念整理、その構成の把握、君主鑑の著者自身を巡る人的ネットワーク分析(プロソポグラフィ)などの手法を用いて分析することにより、俗に「政教分離」といわれる神学的な「正しさ」と政治的な「正しさ」の分離、あるいは「分離」に見える(見せかける)方法が、近世、特に16～17世紀のカトリック宗派の政治権力のもとでいかにして生じたのか、という問題の構造的解明を目指した。

しかし本研究計画の開始とほぼ同時にCOVID-19の流行により研究活動が著しく制約される事態が生じた。特に初年度と次年度に計画していた海外渡航による専門家からの情報収集と未刊行史料の現地調査は不可能となり、研究目的を達成するために方法を調整する必要が生じた。すなわちプロソポグラフィの手法が事実上使えなくなったため、テキスト外のコミュニケーションの影響を検証することは断念し、君主鑑の長期的変容から当該期の特徴を解明することで、目的の達成を図った。これは実証性において当初の計画に及ばないが、研究目的の維持のための許容範囲であると判断した。

### 3. 研究の方法

COVID-19による研究上の制約により、当初予定していたプロソポグラフィによる分析を断念し、テキストの構成と伝達に関する検討を分析し、その結果をオンラインで(2022年後半からは対面で)比較検討する方法に切り替えた。中心となったのは君主鑑テキスト、特に遠隔地でも入手可能な15～17世紀の中近世君主鑑のテキストで、分担者(石黒・甚野)はそれぞれの専門である16世紀ルネサンスの君主鑑(マキャヴェッリとポッターロ)および中世カトリック神学の分析にあたり、代表者(皆川)分析分については中心となる17世紀中葉までのドイツのイエズス会士のテキスト(アダム・コンツェンの『政治学十書』[1620]を中心に、同『ドイツの平和について』[1616]、パウル・ライマンの『平和の構築について』[1629]、ヘルマン・ブーゼンバウムの『道徳神学の神髄』[1645])の分析の他、参考としてサン・ミヒエルのスマラグドゥス(820年頃)、エギディウス・ロマヌス(1272年頃)およびエラスムス(1515年)の君主鑑の照応箇所分析も行った。皆川分については、論題、君主観、聖書および古典との出典関係等について、簡単なデータベースを作成している。これら研究代表者・研究分担者の研究を通じて、カトリック君主鑑がどのような論題を選ぶ傾向にあり、またどのようなメディアを通じて発信されるかを比較検討し、それによってそれらの論調が、中世中期以降のアリストテレス的な調和主義的統治論から近代主権国家の統治論に移行する際、焦点化することの多い政治的暴力(処罰および暴力的抵抗)とくにその評価の神学的説明がどう変化していくか、の分析に力を入れた。

### 4. 研究成果

当初計画していたプロソポグラフィックな研究は周辺的な形でしか研究に取り入れることができなかつたにも拘わらず、研究開始時点に比べれば、多くの未解明であった問題が明らかにな

った。第一に、石黒が対象とするマキャヴェッリとフランチェスコ・ヴェットーリの書簡研究を通じ、属人的なレベルから思想の内容に迫った他、編著書『マキャヴェッリと宗教』(2024)において、統治権の暴力の正当化を巡るマキャヴェッリ思想の研究から新たに解明したように、中世君主鑑からの断絶、近代政治学の誕生と考えられてきたイタリア・ルネサンスの政治哲学が、中世的思想と近代的思想の断絶ではなく、双方を架橋する(そして主権的暴力の正統性に接続する)君主鑑の「公共化」の現れであり、16世紀まで実現しなかったカトリック君主鑑の新たな段階を示している、ということである。この変化は、統治の正義の説得力の強化のために、過去の異教徒(ギリシア・ローマ人)のみならず、マッテオ・リッチなどが報じた同時代の異教徒(中国人)の統治形態をも優れた範とする同世紀後半のイエズス会士ポッターの統治論において、より一層顕著になっている。異教文化をも取り入れた世界観の再構築は、最も異端に非妥協的なイエズス会が極めて積極的であったように、脱神学化とは言い得ても脱宗教化への動きではなく、君主鑑の公共化に応じようとするカトリック教会の動きがそれだけ精力的であったことを示している。その一方、この理論はアリストテレス的権力論によって掣肘されていた世俗的権力者の暴力を、質的に他の暴力とは異なる権力に押し上げ、最初の契約によって全知全能となったホッブズのリヴァイアサンに通じる、「正当な暴力」としての主権的権力の地平を開くことになった。これは宗教か世俗かという二項対立によって、近代主権国家に潜む暴力的側面に目を背けてきた従来の政治思想史に一石を投じる本研究最大の成果であり、カトリック世界の「正しさ」を巡る政治的理性の発展は「遅れていた」のではなく、むしろ「本質を捉えていた」と言える。

一方以前16世紀末スペインのイエズス会士ファン・デ・マリアナの君主鑑の思想分析から、12世紀のジョン・オヴ・ソールズベリとの内容的な連続性を発見した甚野は、今回の研究では15世紀前半の教会を巡る危機(教皇位の分裂といわゆる「公会議主義派」の問題、「北の十字軍」の衰退、フス派戦争、オスマン帝国の台頭と東西両教会合同を巡る問題)の中で登場した神学者ファン・デ・セゴビアの神学思想についてテキスト分析を行い、公会議主義と人文主義の関係に関するヨハネス・ヘルムラートの最新の研究も踏まえて、本研究内容に関わる部分に関する情報提供を行った。それによれば公会議の開催による神学論争の多元化により、カトリック教会内部でも、統治論の根拠となる神学教説は、教会が置かれた状況に適合するよう選択的に構成されていること、それは発展史的に捉えるよりも往復運動の中で捉える方が、歴史的コンテクストに適合していることが明らかになった。この結論は、石黒の上述の成果とも整合するものであり、有機体的なカトリック政治文化を分析する際に、看過できない視点を提供している。

COVID-19による方法変更の影響は、手書史料によるプロソポグラフィックな研究を最も必要としていた皆川卓の研究で最も大きく、予定の期間を一年延長したのも皆川の事情によるものであった。カトリックの宗派厳格主義が頂点に達した17世紀初頭ドイツのイエズス会士の君主鑑(特にアダム・コンツェンの君主鑑『政治学十書』)の内容と、その後のイエズス会士の神学的テキストのジャンルおよびその受け手を比較することで、カトリック的理性概念の変化を析出しようと試みた。その中で発見したのは、この時代に政治的言説の執筆と公開を担ったイエズス会の中でも、コンツェンらの属する南ドイツのイエズス会と、北ドイツのケルンを中心とするイエズス会の間で、発信の仕方に大きな違いがあった、ということである。南ドイツのイエズス会士は君主鑑のみならず、その周辺の文学についてもタイトルの選び方、構成、出典の分布において表現主義的(expressional)であり、神学的原理と統治実践の結合が前面に現れてしまうことが多い(特に宗教和議の神学的違法性を巡る問題)。これに対し北ドイツのイエズス会の発信は、内容において君主鑑とほとんど同じであっても、「君主鑑」と銘打たない(単に君主への「助言」とする)書物が多く、タイトル、構成、出典いずれにおいても印象主義的(impressional)であり、個人の救済への関心に応える構成になっている。その分水嶺が「告解」の役割である。カトリック圏であれば「告解」が君主の信条に重要な役割を果たすことに変わらないが、南ドイツ、特にコンツェンの君主鑑は、告解でやり取りされるべき個別問題を神学的規律に照らし合わせ、理論武装して出版してしまい(その帰結として助言する政策内容は具体的で、そこに「現実政治」の端緒を見る研究者もいる)、宗派論争を引き起こす傾向にあった。これに対し、北ドイツのイエズス会士の政治的「助言」、特に出版物でおこなうその場合、エラスムスの君主鑑から受容された、アリストテレス的政体論を前提したストア的倫理の勸奨に留まり、神学が関わる宗派や宗教政策の問題には沈黙し、個々の告解に委ねるべきとした。

この発展の末に現れたのが、三十年戦争末期の1645年に出版され、17世紀後半のベストセラーとなったイエズス会士ヘルマン・プーゼンバウムの『道徳神学の神髄』である。ここではもはや君主が従うべき固有の倫理ではなく、他の信者と同様君主も従うべき道徳が問題となり、同時に統治者の内面を規制する権力行使への外的規範も消滅し、その行動の是非は純粋に公論の批判に委ねられることになった。1650年代以降、北ドイツに現れる権力政治家的な諸侯(軍事力を重視し、権力外交に身を投じたミュンスター司教ベルンハルト・フォン・ガーレンなど)の行動は、そうした君主鑑から道徳神学への変化の中で、はじめて理解できる。中世には神学的敬虔の一つの表現であった統治が、17世紀の「道徳」の個人的格率化により、神学から切り離されて目的合理主義化した、ということである。皆川はこのプロセスを、科研費研究(B)「中近世キリスト教世界における「包摂する暴力」- 迫害と寛容の二分法を超えて -」(代表・甚野尚志)と共催した2022年9月の山梨大学での研究会、2023年3月の早稲田大学における哲学分野の科研費研究会での招聘研究報告で公表した。また2023年11月には、武蔵大学東西文化融合研究会において開催された、統治論の伝承と伝播に関する報告のコメントにおいて、ヨーロッパ中近世

の君主鑑が伝承される条件を分析的に示し、これは同大学人文学部の紀要で出版予定である。

最終段階の僥倖は、当初断念した君主鑑の執筆者たちのプロソポグラフィーを解明する手がかりとして、君主の統治の心構えから一般的な道德神学への変容に重要な役割を果たした北ドイツのイエズス会士（ケルンやミュンスターなど、ケルン大司教エルンスト・フォン・ヴィッテルスバッハ治下の司教区の諸学院の関係者）の書簡史料が、2009年のケルン市文書館倒壊事件後の整理と COVID-19 下での集中的作業の結果、デジタルアーカイブ化（Historisches Stadtarchiv Köln, Bestände 223, Jesuiten A 17）され、2023年8月になって再建されたケルン市歴史文書館を通じ、その一部をオンラインで入手することができたことである。ただし残余の研究期間内では、それにインデックスを付してデータベース化するのが精一杯であり、その分析は今後の課題であることを付言しておく。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計10件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 1件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 石黒盛久（訳者）、マルコ・ベッレグリーニ（著者）	4. 巻 14
2. 論文標題 サヴォナローラ：預言・改革そして専制への抵抗	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 エクフラシス	6. 最初と最後の頁 22-48
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Morihsa Ishiguo	4. 巻 3
2. 論文標題 Da Machiavelli a Botero. La Ragion di Stato di Botero e le principali caratteristiche filisofia della ;a politica italiana nel tardo Cinquecento	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Blythe Alice Raviola, Chiara Silvagni(eds.), Boteriana III - A trent 'anni dal volume Botero e la 'Ragion di Stato' Enzo A. Baldini (1992-2022)(ed.), Bilanci e prospettive di ricerca	6. 最初と最後の頁 17-26
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 石黒盛久	4. 巻 15
2. 論文標題 マキアヴェッリ思想における市民的心性の宗教的起源 - 15世紀フィレンツェ政治文化を背景に	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 金沢大学歴史言語文化学系論集 史学・考古学篇	6. 最初と最後の頁 1-21
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 石黒盛久	4. 巻 11
2. 論文標題 【翻訳と注解】1513年12月24日付 ヴェットーリ書簡	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 世界史研究論叢	6. 最初と最後の頁 81-87
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 石黒盛久	4. 巻 14
2. 論文標題 【翻訳と注解】1514年1月18日付F・ヴェットーリ発N・マキアヴェッリ宛書簡	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 金沢大学人間社会学研究域学校教育系紀要	6. 最初と最後の頁 125-131
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 佐藤公美、猪刈由紀、踊共二、皆川卓	4. 巻 172
2. 論文標題 モビリティの歴史学のために 中・近世ヨーロッパにおける空間・社会移動の歴史研究の理論的前提	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 甲南大学紀要 文学編	6. 最初と最後の頁 199-213
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 皆川卓	4. 巻 81/1
2. 論文標題 西暦1500年前後の西南ドイツにおける人文主義者・政治と地域的アイデンティティ	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 史苑	6. 最初と最後の頁 31-45
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 甚野尚志	4. 巻 11
2. 論文標題 歴史家・朝河貫一への旅(4) - オットー・ヒンツェの文通と「封建制の本質と拡大」への批判	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 エクフラシス	6. 最初と最後の頁 1-22
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 石黒盛久	4. 巻 3
2. 論文標題 マキャヴェッリにおける「暴力と宗教」再考	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 石川県立大学紀要	6. 最初と最後の頁 65-72
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 石黒盛久	4. 巻 12
2. 論文標題 翻訳と注解 1513年4月21日付F・ヴェットーリ発マキャヴェッリ宛書簡	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 金沢大学人間社会研究域学校教育系紀要	6. 最初と最後の頁 71-76
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

[学会発表] 計8件(うち招待講演 6件/うち国際学会 1件)

1. 発表者名 石黒盛久
2. 発表標題 Botero e la leggenda del Kinsey, citta' celeste: l' impero cinese e l' idea di civilta' nel tardo Rinascimento
3. 学会等名 Europa ed Estremo Oriente: relazioni, incontri e conflitti nella prima eta' moderna, at Florence (Italy) (招待講演)(国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 皆川卓
2. 発表標題 ニエ・フェイリン報告コメント：前近代ヨーロッパの統治理論と比較して
3. 学会等名 武蔵大学東西文化融合史研究会第5回例会(招待講演)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 皆川卓
2. 発表標題 「君主鑑」から「道徳神学」へ - 17世紀カトリック神学の政治と倫理
3. 学会等名 科研費(B)「西洋中世スコラ学における「倫理学を内在化する政治学」への批判的研究」(代表・辻内宣博)研究会(招待講演)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 皆川卓
2. 発表標題 宗派対立終焉期(1635-72)のイエズス会士叙述における異教・異端と暴力ー『聖人列伝』にみられる暴力の評価
3. 学会等名 科研費(B)「中近世キリスト教世界における「包括する暴力」- 迫害と寛容の二分法を超えて」(代表・甚野尚志)第2回研究会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 皆川卓
2. 発表標題 三十年戦争期神聖ローマ帝国の領邦における占領と外交権の変容ーホーエンローエ伯領とミュンスター司教領の場合から
3. 学会等名 外交史研究会(招待講演)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 甚野尚志
2. 発表標題 バーゼル公会議(1431-1449)とは何だったのか Johannes Helmrath の研究を中心に
3. 学会等名 ヨーロッパ中世史研究会(REN)
4. 発表年 2023年



1. 発表者名 石黒盛久
2. 発表標題 Da Machiavelli a Botero: La Ragion di Stato di Botero e le principali caratteristiche della filosofia politica italiana nel trado Cinquecento
3. 学会等名 Boteriana III Convegno Internazionale di Studi (招待講演)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 皆川卓
2. 発表標題 初期近代ヨーロッパの国家間仲裁 - 多様な「主権」を架橋する法発見の背景について
3. 学会等名 外交史研究会 (招待講演)
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計7件

1. 著者名 甚野尚志 (訳者)、シュテファン・パツォルト (著者)	4. 発行年 2023年
2. 出版社 刀水書房	5. 総ページ数 220
3. 書名 封建制の多面鏡: 「封」と「家臣制」の結合	

1. 著者名 石黒盛久	4. 発行年 2024年
2. 出版社 論創社	5. 総ページ数 292
3. 書名 マキアヴェッリと宗教	

1. 著者名 甚野尚志（編著者）、皆川卓他13名	4. 発行年 2021年
2. 出版社 知泉書館	5. 総ページ数 364
3. 書名 疫病・終末・再生 - 中近世キリスト教世界に学ぶ	

1. 著者名 石黒盛久・喜田いくみ（訳者）、アリソン・ブラウン（著者）	4. 発行年 2021年
2. 出版社 論創社	5. 総ページ数 272
3. 書名 イタリア・ルネサンスの世界	

1. 著者名 Takashi Jinnno, Morihisa Ishiguro, Taku Minagawa 他8名	4. 発行年 2021年
2. 出版社 De Gruyter	5. 総ページ数 196
3. 書名 Christianity and Violence in the Middle Ages and Early Modern Period	

1. 著者名 Stefano U. Baldassarri, Morihisa Ishiguro, Taku Minagawa 他4名	4. 発行年 2020年
2. 出版社 Tab edizioni	5. 総ページ数 223
3. 書名 Guerre di religione e propaganda 1350-1650	

1. 著者名 斎藤寛海、皆川卓他17名	4. 発行年 2021年
2. 出版社 山川出版社	5. 総ページ数 756
3. 書名 世界歴史大系 イタリア史 2	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>Boteriana III Convegno Internazionale di Studi  <a href="https://www.centrostudibotero.org/eventi-e-convegni/">https://www.centrostudibotero.org/eventi-e-convegni/</a>  De Gruyter  <a href="https://www.degruyter.com/document/doi/10.1515/9783110643978/html">https://www.degruyter.com/document/doi/10.1515/9783110643978/html</a>  山川出版社  <a href="https://www.yamakawa.co.jp/product/46202">https://www.yamakawa.co.jp/product/46202</a></p>
---

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	石黒 盛久  (Ishiguro Morihisa)  (50311030)	金沢大学・歴史言語文化学系・教授    (13301)	
研究分担者	甚野 尚志  (Jinno Takashi)  (90162825)	早稲田大学・文学学術院・教授    (32689)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------